

県中教研 音楽部会だより

第 39 号

発行日 令和6年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 竹内 文恵
題 字 金山 泰仁 先生

「知識の習得」の更なる充実を

指導主事 平 紀子

今年度は、全日本音楽教育研究会全国大会が富山で開催されました。主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業提案に向け、授業される先生方だけでなく、各地区の先生方も領域毎に熱心に研修され、刺激し合えたことでしょう。

また、学校訪問研修では、素敵な合唱の授業を拝見しました。録音した自分たちの歌声から、課題を明らかにし、パート毎に歌い、聴き合いながら表現を工夫していました。「女声パートは高音から始まり、旋律が下行するから、始めの言葉を大切に歌おう」「男声パートは、逆に旋律が上行するから、高音の言葉を大事に歌おう」などと、歌詞と旋律との関わりについて考え、音で試しながら、曲にふさわしい重厚な表現になるよう生徒が思いや意図をもつ様子がみられた授業でした。

音楽科における「知識及び技能」は、「思考力、判断力、表現力等」の育成と関わらせて習得できるようにします。表現領域の「思考力、判断力、表現力等」の指導事項には、「～表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、～表現を創意工夫すること」とあります。ただ工夫すればよいのではなく、様々な表現を試しながら、新たな知識や技能を習得することと、既に習得している知識や技能を活用することの両方が求められています。例えば、歌唱分野の「知識」について理解するためには、〔共通事項〕と関わらせて指導することが大切です。生徒が曲想を感じ取り、感じ取った理由を「音楽を形づくっている要素」と「音楽の構造」や「歌詞の内容」の視点から、生徒自身で捉えていく過程、これが必要なのです。生徒が音楽活動を通し、曲想と音楽の構造との関わりを音や音楽で確かめながら、実感を伴って理解し、その知識を生かしながら創意工夫する授業を目指していきましょう。

(西部教育事務所)

「全国大会を振り返って」

部長 竹内 文恵

「つなぐ 深める ひびき合う」をテーマに全日本音楽教育研究会全国大会の富山大会が10月、開催されました。授業者をはじめ会場となった呉羽中学校の皆様、本大会に携わってくださった全ての方々のご尽力に深く感謝申し上げます。

本大会では県中教研の研究が結実した素晴らしい提案授業が行われました。歌唱分野では、授業者がR 3年度の中教研大会から、よりよい音楽表現の追求について試行錯誤を重ねました。教材曲「群青」を総合的な学習の時間で取り組んだ震災学習と関連させ、どのように歌うかについて生徒の意見を引き出しながら表現と結び付ける授業が展開されました。器楽分野では和楽器の中でも難しい三味線を用い、「こきりこ」を教材に音色を追求する授業が展開されました。富山市中教研において以前から三味線を用いてきた経験があつての提案であり、参観者は生徒たちの技術の安定感に驚きつつ、三味線を用いる授業への関心を高めていました。創作分野では「クラッピング ラブソディ第1番」の一部を、ICTを活用してペアで創作する授業が展開されました。R 2、4年度に中教研大会で提案された「自分たちの思いや意図に合った創作活動」が本授業で完成された形となります。ICT活用の在り方についても活発に協議されました。鑑賞領域では交響詩「フィンランディア」を用い、音楽そのものから知覚することと感受したことを結び付けながら、オーケストラの色彩豊かな音色や場面の雰囲気の変化を聴きとっていく授業が展開されました。教材曲をあえて中間部から聴き、冒頭部分を予想することで、曲全体を味わって聴くことにつながりました。

どの領域においても今回の経験は音楽部会の宝となりました。本大会を通して培われたつながりを土台とし、次年度以降も質の高い授業の構築へ向けて研鑽に努めていきましょう。

(射・小杉中)

令和5年度 全日本音楽教育研究会全国大会 富山大会 (第18回東海北陸小中学校音楽教育研究大会 富山大会)

歌唱分野

「パート同士の関わりを意識しながら、
表現を工夫して歌おう」

富山市立岩瀬中学校 教諭 碓井 絵美

碓井絵美教諭が、合唱曲「群青」を教材とし、「F～」にふさわしい表現を工夫しよう」という学習課題の下、第3学年で授業を行った。今回は曲の構成とテクスチュアに着目した授業展開であった。授業者の歌詞に関する問いかけから始まった授業は、終始生徒の思いや意図が感じられる意見に溢れており、活発に発表が行われていた。生徒の意見を基に、授業者が問いかけを繰り返し行ったことで、生徒一人一人の「音楽的な見方・考え方」を深めることにつながっていた。また、授業者の楽曲に対する思いや、協働的に合唱を創り上げる過程から学びの積み重ねを実感させたいという情熱が授業の随所に感じられる授業であった。

協議会では、授業での生徒の姿に対して、大会主題の「つなぐ 深める ひびき合う」の3つの視点からさまざまな意見が交わされた。長野県教育委員会参事兼課長の臼井学先生の講話では、「初めてその曲と生徒が会う際に、授業者が何と言って曲を聴かせるか」という言葉が印象に残った。曲を覚えさせるために聴かせるのではなく、意図をもって聴かせることがその後の学びにつながるについて改めて考えることができた。

今回の全国大会に向けて、県内の先生方とチームとなり授業実践や研究を進めた時間は、大変有意義であった。これまでの合唱指導では技術指導が中心となり、本時のように表現の工夫に時間をかけることが少なかった。しかし、この提案を参考に授業を行った際、生徒は歌詞の内容と曲の構成との関わりを意識して表現の工夫について考える姿がみられた。音程を正しく歌うことが歌唱ではなく、教師が生徒の意見をどのように引き出し、



加藤 恵 (黒・清明中)

それを表現できる歌唱技能を身に付けさせることができるかが合唱指導において大切であると共有できた授業であった。

器楽分野

「三味線の音色を工夫して
『こきりこ』を演奏しよう」

富山市立興南中学校 教諭 堀岡麻里子

堀岡麻里子教諭が、学習課題を「どんな三味線の音色で『こきりこ』を演奏したいか、自分の音色をみつけよう」と設定し、第2学年で器楽分野の授業を行った。自分のイメージする「こきりこ」の音色に近付けるよう、また、学習が深まるよう、個の活動では、一人一棹の三味線やワークシートを準備し、ペア活動では、思いや意図をプレゼンしたり、互いにアドバイスしたりした。全体では、音色の工夫を発表し合い、自分の演奏に取り入れたり、ICTを活用して課題を共有したりするなど、様々な工夫が取り入れられていた。会場には、三味線の素敵な音色が響き渡っていた。

協議会では、他県の先生方から、「まず、演奏できていた。その上での自分の音色の工夫になっていたのだから、各奏法のよさを理解して主体的に活動する姿が見られた」「生徒へ口唱歌を提示するタイミングもよかった」「来年、自分もやってみたいと思える授業であった」等の意見をいただいた。

信州大学教育学部教授の齊藤忠彦先生からは、「『主体的・対話的で深い学びの視点』からワークシートに学びの道筋が現れており、主体的に取り組んでいた。知覚と感受が授業の中に位置付けられていた。イメージを書き出すことで表現の工夫につながっていた。ペア学習では、アドバイスという対話を通して、自分の音色を探っていた。事前にゲストティーチャーの演奏を通して音の対話の時間も設定してあった。最後に全員で合わせるときは『自分のイメージを大切にするように』と声を掛けるとよい。また、自由に音色を工夫させるならば、ばちではなく違うもので演奏してみても面白いかもしれない」と指導助言をいただいた。

直井 美幸 (富・大沢野中)



大会主題 つなぐ 深める ひびき合う ～豊かな音楽の学び～

創作分野

「パート同士の関わりを意識して リズムアンサンブルを創作しよう」

高岡市立国吉義務教育学校 教諭 山田 喜博

山田喜博教諭が、第9学年で『クラッピング
ラブソディ第1番』に合う8小節のリズムアン
サンブルを工夫しよう」という学習課題で授業を
行った。

授業では、第7学年時に器楽分野で扱った既習
曲を使い、それに合うリズムアンサンブルの創作
をすることで、これまでの学びを活用し、新たな
創作表現を創意工夫することができた。また、楽
曲に使われているリズムを適宜用いること、どの
ようなリズムアンサンブルにしたいという思いや
意図をしっかりともちつことで、楽曲のイメージを
基にまとまりのあるアンサンブルにしようとペア
で試行錯誤する姿が見られた。そして、自分たち
の作ったものを演奏しながら創作していくこと
で、生徒が自分たちの曲により愛着をもち、音楽
と豊かに関わるきっかけとすることができた。

協議会では、生徒の思いや意図を引き出すため
の指導や技能面での評価等について話し合われ
た。また、創作の学習におけるICT活用の有効性
や、創作に活用できるアプリについての情報交換
も行われた。

中部学院大学特任教授の平田誠先生からは、創
作の学習において、思いや意図をもたせることや、
生徒の気付きや発言を捉え、その根拠等を問う教
師の発問の重要性について助言をいただいた。ま
た、創作における基礎的な知識の指導の大切さにつ
いてもご示唆いただき、日々の指導の積み重ね
や板書等の効果についても改めて考える機会と
なった。

村田 幸子 (高・五位中)



鑑賞領域

「音楽の特徴をとらえ、場面の変化の おもしろさを味わって聴こう」

滑川市立滑川中学校 教諭 米多 彩

米多彩教諭が、第1学年でシベリウス作曲「交
響詩『フィンランディア』」を教材曲とし、「音楽
の特徴をとらえ、場面の変化のおもしろさを味
わって聴こう」という学習課題で鑑賞の授業を
行った。

曲想と音楽の構造との関わりについて考えるこ
とをねらいとした指導計画を作成し、先に楽曲の
後半部分を聴き、前半部分の音楽を想像すること
で、生徒の教材曲に対する興味・関心を高めた。
本時は第2時の前半部分の音楽の特徴を知覚し、
それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じしな
がら、知覚したことと感受したこととの関わりにつ
いて考え、場面の変化のおもしろさを味わって
聴く展開であった。生徒の「もう1回聴きたい」
という発言から、演奏を繰り返し聴き、深く音楽
を味わう時間が十分に確保されていた。

協議会では、豊富な語彙力を発揮し活発に発言
する生徒と、それを受け止め、さらに生徒の感じ
たことや思いを引き出しながら楽曲表現の奥深さ
を味わうことへつなげる授業者との活発なやりと
りについて多くの意見が出され、授業以外の時間
も含む日頃からの指導の重要性を再認識するこ
うができた。

名古屋学院大学元教授の江田司先生からは、「抽
象的な言葉を具体的な言葉に置き換えて話す」「教
室内での授業者の立ち位置や視線の位置を工夫し
生徒の表情を観察しながら授業を展開する」と
いった鑑賞授業における基本的な指導技術や、「鑑
賞の授業において歌うことによる表現」といった
新しい視点による指導方法、「ワークシートは生
徒が『書きたい』と思うものにする」「一人が発
言したからといって、全員が理解しているとは限



らないので、『分
からない』生徒への手
立てを用意しておく
必要がある」といっ
た指導と評価に関わ
る観点から助言をい
ただいた。

荒木 学 (富・速星中)

フレッシュさんから

生徒と共に

入善町立入善中学校 荒川 保香
教員になってから1年、生徒の様子を観察し対話することを大切に、日々授業改善に励んでいる。大きな転機は合唱コンクールだったように思う。私が楽しく堂々と歌う姿を見せたり、パートごとに細かく指導したりすることで、一人一人と以前に増して気軽にコミュニケーションをとれるようになった。日々の授業では、生徒の発言をうまく拾い授業を進められる場面が増えた。ただ、全日本音楽教育研究会全国大会で他の先生方の授業を参観させていただいたり、生徒の活動の様子を見せていただいたりすると、私の授業実践には伸び代がたくさんあると感じた。学級経営や部活動指導等、すべきことは多いが、今年の実践を生かして生徒の実態に合った授業改善を重ねていきたい。

新たなスタートに立って

上市町立上市中学校 笠田 祐子
中学校の教員になって1年が経過した。時間があっという間に過ぎていくが、充実した日々を過ごしている。昨年度まで高校で音楽の授業を担当していた経験を生かしつつ、生徒の現状に合わせて興味・関心をもってくれるようなアプローチの方法を模索し教材研究に励んでいる。学級事務や行事に追われながら授業の準備に苦戦することもあるが、周りの先生方の温かい言葉に助けられることや、生徒に学ばせてもらうことが多くある。これからも教員として研鑽を積み、私自身が感じている音楽の楽しさや奥深さが伝えられる授業を目指して励んでいきたい。

音楽のすばらしさを生徒と共に

富山市立月岡中学校 山本 愛
教員になって1年、音楽のすばらしさを感じてもらいたいと思い、授業を行ってきた。一番印象に残っていることは、合唱コンクールである。練習では、生徒が自ら課題点を見付け、改善方法を尋ねてくるのが何度もあった。生徒の音楽をよりよくしようと取り組む姿やもっと上手になりたいという熱い思いに刺激を受け、指導方法の試行錯誤を重ねた。本番では、心を動かされる合唱を聴くことができ、私も音楽のすばらしさを改めて

実感することができた。

生徒が「音楽が楽しい」と感じ、これからも音楽に親しんでもらえることが私の願いである。そのために授業づくりを工夫し、生徒から多くのことを学び、生徒と共に成長していきたい。

日々の努力

高岡市立牧野中学校 畑中 香璃
音楽科が中心となる学校行事として、合唱コンクールがある。私は、9月に初めて教員として合唱コンクールに携わった。そこで、私は生徒からかけがえのないことを学んだ。

本番までの練習期間では、歌が苦手な生徒も得意な生徒も、一生懸命合唱練習に励む姿が見られた。そして本番では、一つ一つの歌詞に気持ちを込めて歌い上げ、聴いている人に感動を与えた。そこで「感情に訴えかける」という音楽の力を実感させられた。本番で力を発揮できたのは、日々の努力があったからではないかと考える。日々努力することで、本番や大事な時に力を発揮する精神力を鍛えていくことができると生徒の姿勢から学んだ。

私は、もうすぐ教師になって1年が経とうとしている。いまだに授業をすることに不安を感じる時があるが、生徒がよりよく学ぶことができる授業を展開していけるよう日々努力していきたい。

音楽の魅力

小矢部市立津沢中学校 奥村 幸生
合唱コンクールの練習では、歌が苦手な生徒も歌の得意な生徒に音程を教えてもらいながら、どういった感情を込めたいのか、そのためにはどう歌えばよいのかを一緒になって考えながら、練習に取り組んだ。その姿を見て、「音楽は心を通じ合わせる手段」としての側面も持っているのだと改めて実感した。

私はよく生徒が「上手く」歌えるように、「上手く」演奏できるように技術的なところを考えてしまう。しかし、これからの授業では、単に技術的なことだけを向上させるのではなく、生徒の思いや感情を音楽に乗せられるように、そして生徒同士が一緒になって音楽を作り上げていけるようになることを大切にしていきたい。